

# A c a n t h u s

第 38 号

平成 23 年 9 月 6 日  
茨城県立土浦第一高等学校  
進修同窓会旧本館活用委員会

大震災により、  
台座からはみ  
出た玄関の柱  
(2011.8撮影)



←  
夕陽に映える玄関口。大震災以前で、  
柱は台座中央部に『気韻生動』より

…光陰矢のごとし。旧本館が竣工して 107 年。それを設計した駒杵勤治が  
逝って 92 年。そして教室として使われなくなって 31 年。駒杵の縁者も少な  
くなってきた。建築に込められた先哲の崇高なる志を、あるいは若き命を躍ら  
せ、自らの“心の拠り所”とする私たちの強い想いを、いかに次世代に伝えて  
いけばよいのであろうか。私どもに課せられた大きなテーマと言える。これを  
心にしめて、この貴重な文化財をめぐる余話は今号で一応の区切りとしたい。

## 駒杵勤治氏のお嬢様がご来校

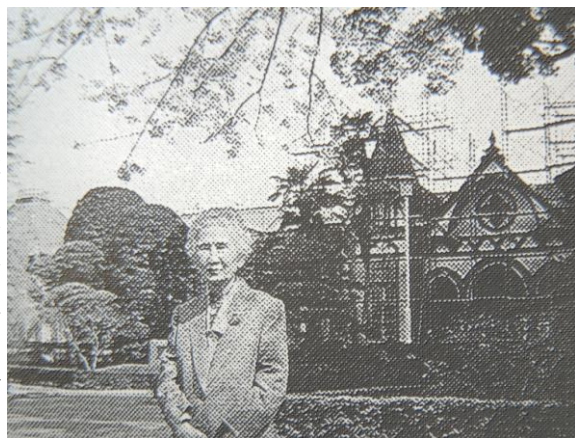
それは確か、「創立百周年事業」がス  
タートした平成 5 年 4 月のことであった。  
一人の女性が本校を訪ねて来られた。そ  
の人の名は「駒杵幸子」さん。駒杵勤治  
のご令嬢（養女）に当たる方で、当時 81 歳  
とおっしゃっていたと思う（駒杵は茨城  
県に奉職中の 27 歳の時に吉村みはる様と  
結婚。子宝には恵まれなかった）。ご長  
男の奥様である川越順子さんに付き添わ  
れ、遠路遙々、広島からの来浦であった。

お二人を本校まで案内してくださった  
のは奥村好太郎氏（高 6 回卒）。奥村氏は、  
四季折々に万華鏡のごとく千姿万態をみ  
せる旧本館のたまらない魅力に突き動か  
され、6 年もの歳月の間、シャッターを  
切り続けられていた。そしてこの翌年  
には、写真家大久保滋氏（高 8 回卒）と  
ともに、旧本館の写真集『気韻生動』を自  
費出版（平成 6 年 3 月）されたのだった。

このときは、出版に向けて駒杵勤治に関  
する調査研究も精力的に進められ、その  
中で広島県在住の幸子様にとどり着かれ、  
ご来校に際しても労をとられていたのだ。

幸子様は、うららかな春の陽光に映え、  
若き父の熱誠が脈打つ旧本館を、玄関前  
でも館内でも、納得されるかのように、  
幾度も首を縦にふりながらゆっくりとご  
覧になられた。そしてすべてを脳裏に焼  
き付けようと、細部にまで視線を走らせ  
ている様子がうかがえた。また時々立ち  
止まってじっと見遣る姿は、胸中にいる  
父に語りかけている時間のようにも見え  
た。特に「大棟梁駒杵勤治」の棟札を前  
にすると、食い入るように見つめられ、  
身がかがめてまで文字の一つ一つを追わ

れていたのは、私どもにとつても、大変  
印象に残る一コマであった。



旧本館をご覧になった駒杵幸子さん（1993・4）

この日、取材に訪れた新聞社のインタ  
ビューに対しては、

「義父の建物を見るのが長年の夢でした。

これで親孝行ができました」

と、率直に喜びを語られた。

駒杵勤治夫妻の写真が載せられた資料  
に、感想を求められ、

「どんな人かわからなかったもので、本当に  
うれしい。来た甲斐がありました」

と、喜色満面の笑みを浮かべられたのだ  
った。また、同行の順子様は、

「祖父が偉大な設計技師だったことがわか  
り、子どもにも伝えることができました」

と、祖父の偉業を実感され、興奮ぎみに  
話されていたのも忘れられない。

こうしたことがつい昨日のように思い  
返されるが、その後、お二人とはまった  
くの音信不通になってしまっている。こ  
れまた世の常であり、やむを得ないこと  
なのだろう。

ところで駒杵幸子様は、建築家の真価  
を発揮した父の面目躍如となる旧本館を  
直接目にされ、詠んだ歌 10 首を『気韻生  
動』に寄稿された。在りし日の父の姿を  
たぐり寄せつつ、娘としての真情をスト  
レートに吐露されている。いずれも心を  
揺さぶるもので、その全てを紹介したい。

案内受く土浦一高の本館の  
父の設計のモダンさに触る

玄関の屋根に並べる尖塔と  
アーチの入り口に独創性見ゆ

重文の指定受けたる学校の  
本館遺れど父すでに逝く

資料室の棟札に遺る父の名の  
前に立ち停まり暫し額すく

建築の技存分に発揮して  
本望ならん死したる父は

重文に指定されたる父上の  
建てたる本館われは見飽かず

父の霊眠り安らからん  
建築の技認められ重文となりて

帝大の建築学科を父上は  
主席で卒業されしと聞きぬ

両親の写真初めて眺めつつ  
語りかけおり父と母とに

勝れたる建築技師の名に  
恥ずることなくわれ生き抜かん

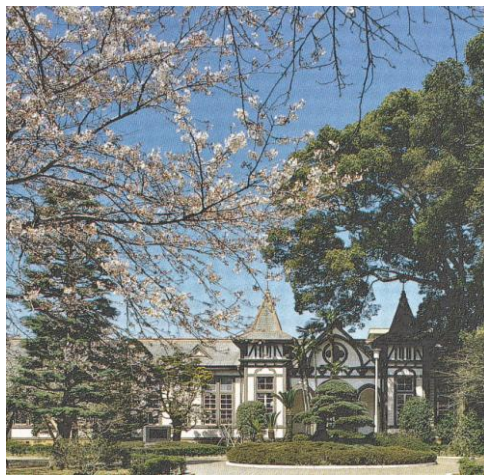


## 奥村・大久保両氏の母校愛

ここで、奥村・大久保両氏のご厚意について一言ふれておきたい。お二人は、本校百周年事業の際に「何かの役に立ててほしい」と上梓された写真集『気韻生動』三百部を本校に寄贈してくださった。母校愛に燃える両氏は、多大な自己犠牲を歯牙にもかけず、旧本館写真集づくりに勇往邁進され、出版にまで漕ぎつけられたのだ。奥村氏は、撮影ノートに「…学校の許可は営利を目的としない条件：。20回近く取材したが、季節による変化は素晴らしく、その折々に見せる顔はいつ見ても飽きさせない魅力をもっていった。…どうしても入れたいカットが：雪景と夜景である」と記されている。ここからは、母校に寄せる両氏の底知れない「誇り」「期待」「愛着心」「強い絆」がくみ取れるとともに、すぐれた美的感性や芸術的達人技をもって苦心惨憺・創意工夫を重ねつつ奮闘する様子が彷彿させられるのだ。両氏の熱い至情の姿勢には、ただただ敬服するばかりである。

両氏のお志を確かに受け止めた私どもは、周辺の方に同写真集の購入を懸命に呼びかけた。するとまたたく間に三百部は完売され、百万円もの浄財に形を変えた。そしてそれは、両氏から寄付されたものとし、「百周年基金」に組み入れさせていただいた。また『気韻生動』にある写真を、本校百周年記念誌『進修百年』のグラビア「春・夏・秋・冬」に拝借したい旨をご依頼申し上げると、一も二もなくご快諾を賜った。さらにはその原版まで頂戴するご温情にも浴したのだ。両氏には感謝することしきりなのである。

『気韻生動』にある両氏の渾身作を本号に一部掲載し、その景観美の精華を心に刻むことで改めて御礼の意を表したい。



旧本館の春(『気韻生動』より)



旧本館の夏(『気韻生動』より)



旧本館の冬(雪景)(『気韻生動』より)



旧本館の夜景(『気韻生動』より)

### 勤治の孫駒杵健治氏からのお手紙

閑話休題。駒杵幸子様の甥に当たり、草加市在住の駒杵健治氏(幸子氏夫妻同様、健治氏のご両親も駒杵の養子であった)からも、平成14年3月にお手紙をいただいた。その主要部分を抜粋すれば、

「…私は駒杵健治と申します。…貴校旧茨城県立土浦中学校の洋風建築を建築したと言われる、駒杵勤治の孫に当たります。平成6年、奥村好太郎氏が：刊行されました際、私の所を尋ねられ、勤治の写真をお貸しした事もございました。…駒杵幸子を広島から呼んで、貴校を見せただけでしたが、私は同行する機会を無くし今日に至って居ます。」

…来る3月22日(金)に、私共夫婦と娘の3人でお訪ねし：室内及び展示室を拝見したいのですが…

祖父勤治は、大正8年2月27日福岡で亡くなりましたが、亡くなる12日前の15日に私が生まれ、喜んだ祖父が私に健治の名前を付けたと父から聞いて居ます。祖父には子供がなく、私の父と母を養子養女とし、更に駒杵幸子の主人駒杵常作を養子にしたと聞いて居ます。…

私の子供に、祖父の残した重要文化財の建築物を見せておくのは、私の責任でもあると思ひ、今回の土浦行を…」

とあり、本校に訪問したい旨が述べられていた。ただ、実際に来られたのかどうかは、今日に至るも確認できていない。ちなみに『気韻生動』には、勤治の身内としては養女幸子さん、孫(別養嗣の長男)健治氏、甥の駒杵成一氏らのご存命との記述がある。しかしこれは17年前のこと。現時点では、勤治の縁者に関しては、詳細は不明としか言いようがない。

### 旧本館における喫緊の課題

聖堂等の建築を通して蓄積されてきた厳粛な空間と光量の最大限を追求したゴシック風建築。その技術の粋を尽くした旧本館。天を指す尖塔、多彩なアカンサス意匠、手すきガラスの大窓、高い天井と高床の室内。どれもこれも目を引く匠の技。築後107年を経た国重文であるとともに、同窓生にとっては青春の聖なる記念塔にもなっている。今秋にはここで結婚式を挙げる卒業生もいると聞く。

旧本館は、一部教室が部活動に活用されているが、30年以上にわたり通常授業には使用されていない。にもかかわらず、従前からの雨漏りなどに加え、先の大震災の影響(小紙34号で詳述)もあって、損傷は建物全体に拡がっている。今後は、解体修理を含め、保存の方法を真剣に検討することが喫緊の重要課題であるのは論を待たない。それは、単に貴重な文化財を保存する意味合いにとどまらず、「大棟梁駒杵勤治」の志を後世に継承させていくことにも通ずる。これが今の私共に課せられた使命ではないかと思う。(完)